

『身になりますように。』 ～願い～

ルカ1：27～50

「願い」

この身になりますように。」とはどういう事でしょうか。どうにもならない現実に直面し、信じられないことが起こっている時、マリヤは「この身になりますように。」と決断し、「私にそのことが起こりますように。」という「願い」になったのです。私たちが暮らすこの社会では、「願い」を忘れている人が多いと言われています。それは、私たちには物理的には困っていないからです。聖書の原則は、求める人とえられる、探すと見つかる、聞くと聞かれる、これに徹しています。今日、マリヤが決断したように神さまに願い求める者になりたいのです。その「願い」もうわべではなく心の底から願っている「願い」に生きることができますように、礼拝を通して神さまに祝福の恵みを受け取っていきたいと思います。

ヨハネ1：1～14から

私たちは目の前の見える現実に影響を受けてしまいます。願っていたことがダメだった、安心していたものが失われた、上手くいくはずのことがそうならなかった。そうなった時。私たちは失望してしまいます。今日の主人公マリヤもそうでした。

「ことば」（ヨハネ1：1）を聞いた時、私たちがどう判断するかが今日のテーマです。現実と神のことばのギャップです。目の前の現実に直面した時、「光」（ヨハネ1：4）に頼ることができれば、「いのち」がそこにあつて「光」となるのです。この「ことば」があなたの中に住んでいることを本当に知っていますか。

「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、なんと幸いなことでしょう。」（ルカ1：45）と自分に言えますか。マリヤは命懸けでした。私たちもこのことばに命を懸ける必要があるかもしれません。

ルカ1：35～50

「あなたのおことばどおりこの身になりますように。」（ルカ1：38）と「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、なんと幸いなことでしょう。」（ルカ1：45）このことばは、普通に考えると言えるような状況ではありませんでした。私たちは信じられないことが起きると動揺し、冷静でいられなくなります。目に見えることがあまりにも不自然で受け入れられないのです。しかし、神さまが私たちの人生に関わってくださることはこのようなことです。それを信じれるか？と問われているのです。信じなさい、と言われているのです。なぜなら、「神にとって不可能なことは一つもない」（ルカ1：37）からです。これは難しいことです。

でもマリヤは信じる決断をして、自ら「ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」と預言したように、全世界の人がマリヤのことをしあわせ者と呼ぶようになりました。「見ずに信じる者は幸いである。あなたは見たから信じたのか。」神さまは私たちにこのメッセージを問いかけています。神さまは、私たちが自分の決断で信じる道を選べる者にさせたいのです。それは、私たちが生きるこの地上には多くの患難があるからです。そして日々の私たちの小さな決断を神さまは見ておられます。私たちは小さなことに忠実であります。今日の聖書箇所でのマリヤとエリサベツの会話は、二人だけの小さな世界でしたが、その会話は本当に美しいものでした。そして正しいことばが、不安だった二人を保障したのです。

ローマ7：15～25

私たちにはしたいことがあります。こうあるべきということがあります。けれど、したくないことをしてしまうのです。そちらの道を選ぶのか、「おことばどおりこの身になりますように。」と言えるかのどちらかです。私たちは神さまを利用することは願っていなかったはずです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。（ローマ7：24～25）

私たちも、神に感謝してこの戦いを忍耐をもって戦い抜きたいものです。

神さまはみことばで私たちの根底を変えていく

- ・Relation or Religion
- ・神のみもとに or 奉仕（労働）
- ・交わり 平安 or 蓄え（心配 蓄え 執着）
- ・信仰 神自身を求める（みことば）→聖霊の満たし
- ・願い、志→神の御心→奇跡

神さまが私たちに求めているのは、私たちとの関係です。1対1の関係を築いて、私たちが神さまの御心にかない、私たちが願うことが神の御心と一致するなら、それに必要なものは全て満たす、備えると言われているのです。

備えられていないのなら、それは私たちの目的がずれているからです。されているとだんだん疲れてきます。つまり労働になってしまいます。その労働は、神の恵みを忘れさせていきます。だから私たちは神のみもとに行くことを忘れてはいけません。ではどうやって行くのでしょうか。それは、神のことばを思い出させる聖書です。みことばに近づくのです。そうすると、交わりによる平安が与えられます。神さまは私たちに安心ではなく平安を与えてくださいます。しかし悪が与えるのは不安です。だから人間は物理的に蓄えて安心を得ようとします。そこで神さまが私たちに与えたのは信仰です。私たちが信じることができれば、神自身を求めるすることができます。それがみことばです。それによって聖霊の満たしを見出することができます。そうできた人は願うようになります。次のステップアップへの人生を歩んでいるなら、自分の志と願いが、神のそれと一致していることを祈ってください。神と一致した願いと欲は違うのです。神さまは教えています。「神にとって不可能なことは一つもない。どうかこの身になりますように。」と祈れと。すると奇跡が起こるのです。

マルチングルター

ルターは1450年くらいに生まれドイツの貧しい家で育ちます。親は彼を弁護士にしたいと思っていましたが、ルターは神の道を選びたいと思っていました。初めて教会で聖書全体を見、今まで学んできたこととの違いに気づいたのです。自分の罪の大きさを知り、恵みの中で赦されるようなことではない、と、とても落ち込みました。その時、彼を助けたのが修道院の師匠でした。自分を責めるルターを慰め、イエス・キリストもこうした、と教えました。そこでルターは聖書の本質を学んでいます。そしてルターは異端者と呼ばれるようになりました。ある時、ルターの命をねらいに来た者がいました。

しかし、その人はルターを殺すことができませんでした。それは、殺しに行つた時、ルターの祈りを聞いたからです。「神よ。私を通してあなたの真実の愛をこの世界に伝えさせてください。」神の道に生きること。それは悪でさえもその人の人生をおびやかすることはできません。おびやかされていても、神の子はそれに届することがなかったのです。私たちは、現実逃避の願いではなく、心の内にあるほんとうの願いと神の願いが一致するとき、私を通して神の計画がなされることを共に祈りたいと思います。

まとめ

私たちが整えるべき道は、まさしく心の道です。私たちはいつも、見える現実を変えようと奮闘していますが、神さまは、事実と現実の未来を見ています。なぜなら、事実と現実の先に神の奇跡があるからです。私たちが未来だと思うその場所に、神は将来の計画を立てています。私たちは未知ですが神には計画です。なぜなら神はこう言ったからです。「私はアルファでありオメガである。」と。つまり神は、最初と最後を司るのだと言われたのです。このことを本当に信じていますか。そうであるなら、どのような状況にあっても、この身になりますように、と祈れるのです。大事なのは、私たちの願いがそうなるかどうかです。私たちが願いを願うのは、大切な奉仕です。私たちは、この地の大天使として遣わされたのです。この地で光として建てられたのです。私たちは地の塩、世の光となりたい。神にとって不可能なことはないと本当に信じていますか。今、私たちの祈りを神様の前に祈りたいのです。

もし、自分の願いがわからないなら、神さまに聞いてください。願うことができない、これは私たちがこの社会に生きた痛みです。けれど私たちは、父の願いを聞くことができます。「私に何を願っているのですか？」静まって神さまがあなたをどう願っているかを聞いてください。

神さま。私たちに、見えるものでなく見えないものにこそ目を留める力を与えてください。一時の感情や相手の態度に右往左往されることなく、その人やその問題に対して、本当に心から願う行動を、本当に求めていることをマリヤのように「この身になりますように。」と祈ることができますように。

。

（要約者：秋山 恒子）

（2025年12月7日）